

## 口永良部島, 12月18日噴火の火砕流の写真判読

## 概要

2018年12月18日の火砕流の流下範囲を判読したところ、流下範囲は北西側：1.1 km、南西側：0.9 km、東側：0.9 kmであった。火砕流の平均流下速度はおよそ20m/sで、空中写真からは樹木の燃えた跡や、立木が倒れているのは確認できないことから、火砕流はそれほど高温ではなく、流れの勢いも強くなかったと考えられる。今回の火砕流は、2015年5月29日に発生したものより小さいが、それと似た特徴を持つ火砕流である。

## 本文

気象庁が撮影した空中写真を基に、2018年12月18日の火砕流の流下範囲を判読した(図1, 2)。火砕流の流下は、新岳山頂火口の中心から、北西側：1.1 km、西側：0.9 km、東側：0.9 kmまでとなる。火砕流は、火口周辺では面的に流れ下がったが、山麓に下るにしたがって、地形的に低所の谷沿いを流れ下り、ローブ状に噴出物を堆積させたことが写真から読みとれる。火砕流の平均流下速度を監視カメラの映像と流下距離から算出すると、およそ20m/sである。空中写真からは樹木の燃えた跡や、火砕流によって立木が倒れているのは確認できなかった(図3)。火砕流はそれほど高温ではなく、また流れの勢いも弱く、立木を倒壊させるほどでなかったと考えられる。なお2015年5月29日に発生した火砕流と比べると、今回の火砕流は、流下範囲は狭く規模は小さいが、樹木の炎上跡や立木の倒壊などが確認できなかったことや流下速度などについては似ている。



図1 火砕流の流下範囲

黒線:12月18日の火砕流の分布。黒矢印:谷筋で厚く噴出物が覆っている部分(ローブ状)。地形のゆるい所は判読の位置精度が悪い。基図には国土地理院の電子地図(電子国土 Web サービス)を使用。

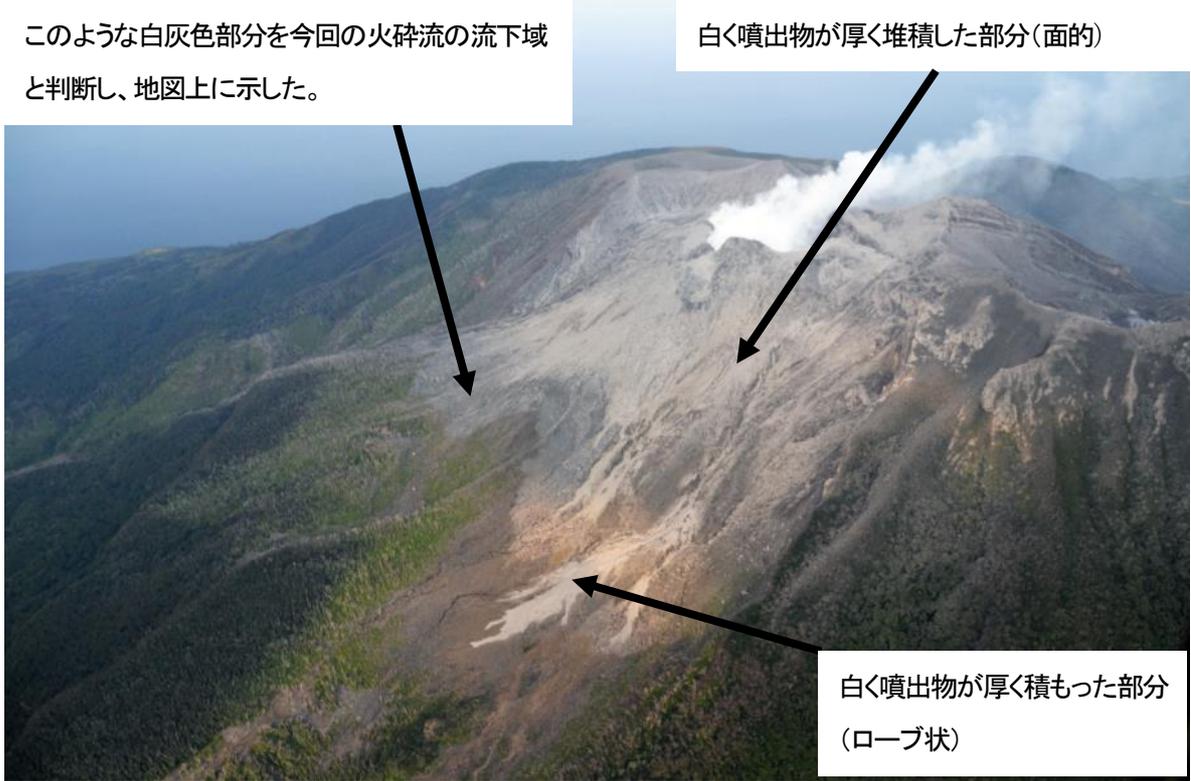


図2 山体南西側上空から(地方整備局ヘリより)。気象庁撮影。



図3 西側に流れ下った火砕流の末端(ローブ状の部分)。気象庁撮影。